

「寒食散」の中醫學的展開に關する一考察

竹 宮 英 朗

一、はじめに

(一) 問題の所在と研究方法

魏晉南北朝時代、士大夫や文人が「寒食散」を服用する風習が流行し、その弊害を被った者も多かったことは有名である。魯迅と余嘉錫の研究が先驅けとなり、それを皮切りにいくつかの基本研究がなされてきた。⁽¹⁾⁽²⁾ただ、「寒食散」を醫學面から考察した研究は未だに不十分であるので、本稿では先行研究を踏まえつつ、その缺を補うことを試みる。

本稿では、「寒食散」の效用と副作用、及びその對應方法などについて記した醫學文献を手がかりとして、それに引用されている文献をできる限り時代順に並べ、そこに見られる醫學的展開を分析する。本稿で主に扱う醫學文献は東晉の葛洪の『肘後備急方』、隋の巢元方の『諸病源候論』、唐の孫思邈の『千金要方』と『千金翼方』、王燾の『外臺祕要方』(以下『外臺祕要』)、そして日本の平安時代に丹波康賴が編纂した『醫心方』である。⁽³⁾これらの書物には魏晉南北朝から隋唐にかけて用いられていた藥の處方が集められており、既に散佚した書物も

引用されている。「寒食散」についての言及は、例えば宋代官製の『太平聖惠方』など、これらより後に編まれた醫學文獻に見られることもあるが、管見の限りでは殆どが前述の文獻を引用するに留まっている。

(二) 傳世の醫學文獻に引用された「寒食散」についての論述

行文の便宜のため、上述した諸醫學文獻に引用された「寒食散」に関する論述の作者と推定成立時期を先にここで述べ、その内容については後で詳述する。

まず、目錄學的なアプローチとして、『隋書』經籍志(以下「隋志」)を紐解いてみると、「寒食散」について論じたと思われるものとして、醫方の二五番目から二八番目までの十の文獻が挙げられている。

『寒食散論』二卷(梁有「寒食散湯方」二十卷、『寒食散方』十卷、『皇甫謐曹欽論寒食散方』二卷、亡)／『寒食散對療』一卷(釋道洪撰)／『解寒食散方』二卷(釋智斌撰、梁『解散論』二卷)／『解寒食散論』

二卷(梁有徐叔嚮『解寒食散方』六卷、釋慧義『寒食解雜論』七卷、亡)¹⁾

「隋志」は「寒食散」について論じた書籍を最も多く挙げており、かつ成書時期も比較的早い。これに續く二九番目は以下のようになっている。

『雜散方』八卷(梁有「解散方」、『解散論』各十三卷、『徐叔嚮解散消息節度』八卷、『范氏解散方』七卷、『解釋慧義解散方』一卷、亡)

「寒食散」以外にも様々な散薬が當時服用されており、その副作用に對處するための處方も考案されていたと考えられる。また、上記以外にも、「隋志」の醫方の百十四番目から百十九番目は、當時の服餌に關連すると思われる文獻が挙げられている。

『藥方』五十七卷(後魏李思祖撰、本百一十卷)／『稟丘公論』一卷／『太一護命石寒食散』二卷(宋尚撰)／『皇甫士安依諸方撰』一卷／『序服石方』一卷／『服玉方法』一卷

余嘉錫の考證によれば、このうちの『皇甫士安依諸方

撰』は、前掲の『論寒食散方』とは異なり、諸家の「寒食散」についての論を集め、注を附けたものだというところである。余氏の説の他、これを『論寒食散方』と同一書物だとする説や、「寒食散」とは全く関係ない諸醫方を集めたものだとする説もある。⁵³⁾ また、『稟丘公論』について、余嘉錫は曹欽の『論寒食散方』だと考證している。『魏書』武文世王公傳における曹徽傳の記載によれば、曹欽は曹徽の子であり、そして、それに對する裴松之の夾注によれば、曹欽が麋丘公であり、『解寒食散方』なる書物を編んだことがわかる。

曹欽は晉に入り、麋丘公に封じられた。(中略)曹欽が編纂した『解寒食散方』は、皇甫謐の編纂したものと並び世に行われた。⁵⁴⁾

「隋志」における並び順及び以上の考察から、『稟丘公論』、『皇甫士安依諸方撰』はそれぞれ曹欽と皇甫謐が著した「寒食散」に關する書物であることが推測されよう。一方で、これらの書物のうち、前節で掲げた傳世の醫學文献に引用されたと思われるものとして、皇甫謐と曹

欽の『論寒食散方』、道洪の『寒食散對療』、慧義の『寒食解雜論』が挙げられる。また、『諸病源候論』、『外臺祕要』、『醫心方』は共に東晉の陳延之による『小品方』を引いている。引用された『小品方』の文中で、更に道洪の『寒食散對療』を引いているため、「寒食散」に關する『小品方』の記述は『寒食散對療』より後のものと推測できる。そして、慧義は晉末の佛僧であることから、諸先行研究の考證と合わせれば、皇甫謐と曹欽の『論寒食散方』、道洪『寒食散對療』、陳延之『小品方』、慧義『寒食解雜論』の順番となる。

これらのほか、『醫心方』は、薛曜、秦承祖、許孝崇、夏侯氏、孔恂、龐氏(『醫心方』の掲出順)などの説を引く。このうち、秦承祖については余嘉錫の考證によれば南朝梁に生きた人物であり、醫學の著述もある。詳しくは後述する。

薛曜は『醫心方』において、「中書侍郎薛曜」、「薛侍郎」、「薛公」として引用されているが、『外臺祕要』等の醫學文献以外には、薛曜が中書侍郎となった記録は見

られない。『全唐文』によれば、その父、薛元超は中書令であった。⁽⁸⁾『外臺祕要』には『薛侍郎服乳石體性論』の引用があり、服餌に關する書物も著していた。また、『新唐書』藝文志の醫術類にそれまでの目錄に記載がなかった「寒食散方并消息節度」二卷⁽⁹⁾が見られるようになり、『醫心方』卷十九の「服石發動救解法第四」に見える「皇甫謐薛侍郎寒食藥發動證候四十二變竝消息救解法」に、皇甫謐の文に所々「薛公云」として引用があることから、薛曜が皇甫謐の『論寒食散方』に何かしら注を附け、或いは手を加えたものが、『寒食散方并消息節度』となったのではないかと筆者は推測する。

この他、許孝崇は唐代の尙藥奉御であり、⁽⁹⁾孔恂は西晉の平東將軍衛尉である。⁽¹⁰⁾夏侯氏については、如何なる人物であるかは定かではないが、南朝梁の阮孝緒による『七錄』に「夏侯氏藥方」七卷とあるので、⁽¹¹⁾兩者同一人物であると假定すれば、少なくとも梁以前には夏侯氏の「寒食散」に關する論述が成立していたと推測できる。龐氏については、調査した限りではその正體は明らか

ではない。

以上の考察から、それぞれの「寒食散」に關する論が成立した順番は以下のように推定できる。

(三國から西晉初) 皇甫謐、曹欽↓孔恂、道洪『寒食散對療』(前後關係不明) ↓(東晉) 葛洪『肘後備急方』、陳延之『小品方』 ↓(東晉から劉宋) 慧義『寒食解雜論』 ↓(梁以前) 夏侯氏(?) ↓(梁) 秦承祖 ↓(唐) 許孝崇、薛曜 (龐氏は不明)

本稿では、作者並びにそれぞれの「寒食散」についての論述が成立した順番を踏まえ、以降の論を進めていきたい。

二、「寒食散」の由來と流行

それぞれの「寒食散」に關する論に入る前に、「寒食散」の由來と「寒食散」が流行した経緯について、先行研究を踏まえ、簡略に述べる。

(一)「寒食散」の由来

「寒食散」が何時、何人によって創られたのかは定かではない。また、「寒食散」には「五石散」という別名もある。

『千金翼方』卷二十二「飛煉」の「解石及寒食散並下石第四」には、五石とは何かについて以下のように記してある。

凡そ「五石散」で、以前は「寒食散」と名を冠したものは、この散は、冷たいものを食べ、冷水で體を洗い、寒を取り込むことをよしとしたからであり、ただ酒だけは清いものを熱い状態で飲むのが良く、そうせねば様々な病氣になってしまう。⁽¹²⁾

この五石が何を指すかは諸説ある。最も古くは『史記』扁鵲倉公列傳に記事が載っている。

齊の王侍醫逐（官職は侍醫、名前は王逐）が病氣になり、自分で「五石」を煉って服用した。私（淳于意）が通りかかった所、王逐は私に、「わたくしめが病氣になってしまいました、よろしければ診て頂け

「寒食散」の中醫學的展開に關する一考察

ないでしょうか。」と言った。そこで、私は彼を診察して、「貴方は中熱（熱が内にこもっている）の病氣に罹っています。論に『熱がこもってお通じがない場合、五石を服用してはならない。』とあります。石の藥效は激しく、あなたはそれを服用してお通じがあまりないので、すぐに服用をやめてください。悪いできものができる兆候が見えております。」と告げた。⁽¹³⁾

早くも淳于意の時代には、既に「五石散」が存在していた可能性もある。ただ、この記述からは「五石」の處方は判明しない。葛洪の『抱朴子』金丹篇では五石を「五石者、丹砂、雄黄、白礬、曾青、慈石也。」としている。先行研究では一般的に、「寒食散」は張仲景の手によるものとされる。『諸病源候論』卷六「解散病諸候」の「寒石散發候」の項に引く皇甫謐の言に、以下のように述べられている。

「寒食散」というものは、（その發明者は）世間では知られておらず、或いは華佗、或いは張仲景による

ものとされている。事實に照らし合わせて考えるに、華佗は詳しく緻密であり、處方の類はシンプルである。對して、張仲景の經（『傷寒雜病論』を指すと思われる）には「侯氏黑散」や「紫石英方」があり、數種の違いがあるだけで、節度はほぼ同じである。よつて、寒食草、石の二方は華佗ではなく、張仲景の手によるものである。¹⁴⁾

「侯氏黑散」と「紫石英方」はともに『金匱要略』に見られ、それぞれ「中風歷節病脈證并治」と「雜療法」（「紫石英方」は「紫石英寒食散方」となっている）に記載されている。張仲景は後に使用されるような用途で「寒食散」を創り出したわけではなく、中風や傷寒を治療するために用いた。また、『針灸甲乙經』の序文や『太平御覽』卷七二二の方術部三、醫二に、張仲景が王仲宣に「五石湯」を勧めた記事があり、張仲景が實際に「寒食散」に類似のものを治療に使用した證據でもある。ここに『針灸甲乙經』の序文に見られる記事を試みに掲げる。

張仲景が侍中の王仲宣に會つた時、（王仲宣は）二

十才あまりであり、（張仲景は王仲宣に對して）「貴方は病氣です。四十で眉毛が抜け落ち、眉毛が落ち切つて半年したら死ぬでしょう。五石湯を服用すれば免れることができます。」と告げた。王仲宣はその言を耳障りに思い、五石湯を受け取つたが、結局飲まなかつた。（中略）その二十年後、果たして眉毛は抜け落ち、その後百八十日して亡くなり、終にはその豫言通りとなつた。¹⁵⁾

この他、「五石」の名を冠し、處方が似ており、かつ、その節度が似ているものとして「五石更生散」と「五石護命散」があり、これらは『千金翼方』卷二二「飛煉」の「飛煉研煮五石及和草藥服療第二」に記載されている。「五石更生散」は主に男子の五勞七傷に效き、「五石護命散」は虚勞百病を治す、言わば萬能藥のような效用があるとされる。

今便宜のために順番を變えて上述した處方の成分を以下に示す。

「侯氏黑散」は、礦物性藥物は礬石、動物性藥物は牡

蠟、植物性薬物は防風、桔梗、乾薑、桂枝、白朮、人參、細辛、菊花、茯苓、黄芩、當歸、芍藥からなる。

「紫石英方」は、礦物性薬物は紫石英、白石英、赤石脂、鐘乳、太乙餘糧の五つを含み、動物性薬物は文蛤、植物性薬物は防風、桔梗、乾薑、桂枝が「侯氏黑散」と同じで、栝藹根、附子、鬼臼が異なる。

「五石更生散」の礦物性薬物は紫石英、白石英、赤石脂、鍾乳が「紫石英方」と同じで、五つ目は礬石でも太乙餘糧でもなく、石硫黄であり、動物性薬物は「紫石英方」の文蛤から海蛤に變わり、植物性薬物は防風、桔梗、乾薑、桂心が共通で、白朮、人參、細辛が「侯氏黑散」とほぼ同じで、栝藹、附子が「紫石英方」と同じである。「五石護命散」は「五石更生散」の附子が黒附子に變わっただけである。

なお、「礬」と「礬」の字について混同があり、本草類の書によれば、「礬石」は酸寒、無毒で「礬石」は辛大熱、有毒とされる、と指摘する説もある¹⁶⁾。

ここで、上記四つの處方を念頭に入れて、出土文献に

見られる處方に着目してみると、前漢の時代から後漢にかけて、その雛型となるものが形成されつつあった、と筆者は推測する。今試みに關連する出土文献の處方を下記表一にまとめる。

武威漢簡の第六〇七、敦煌漢簡の第二〇一二、居延漢簡の第八九、二〇簡はいずれも傷寒を治すための處方で、上述の四處方における植物性薬物の組み合わせが既に一部見られる。武威漢簡の第六〇七簡の前後、第三〇五及び第八簡は咳や聲枯れに對應する處方であり、これらの症状は傷寒の症状の一つとして十分に考えられ、また、特に第八簡は七味も「石散」と一致している。また、武威漢簡の第八四、八五簡は同じ「白水侯」の手によるもので、男性の「七疾」或いは「七傷」を治療する處方で、「五石更生散」の薬效と似ている。その前の第八三簡はその處方の効用が記されておらず、如何なる薬效を持つものか定かではないが、竝び順、處方名(公孫氏は名門貴族)、及びそれぞれの薬物の働きから、「白水侯」の處方と似通ったようなものだと推測される。これらの處方

表一 處方名は通常「治+病名或いは症状+方」という形式で記される。「■」は破損或いは解讀不能な文字を示している。處方については、比較する上での便宜を圖るため、原文とは順序を入れ替えた形で記している。「/」より前が前述の四處方に見られる藥物である。⁽¹⁷⁾

出土文獻	簡數	處方名	處方（分量は省略した）
武威漢簡	3-5	治久咳上氣、喉中如百蟲鳴狀、卅歲以上方	桔梗、桂、薑/蜀椒、烏喙、柴胡
	6-7	治傷寒逐風方	附子、細辛、朮/蜀椒、烏喙、澤瀉
	8	治雁聲■■■■言方	朮、防風、細辛、薑、桂、附子、桔梗/蜀椒
	83	公孫君方	礬石、禹餘糧/厚朴、檟米、牡菊、黃芩
	84	白水侯所奏治男子有七疾方	栝蒌根/天雄、牛膝、續斷、菖蒲
	85	東海白水侯所奏方、治男子有七疾及七傷	桔梗、防風、赤石脂/牛膝、續斷、遠志、杜仲、山茱萸、柏實、肉蓯蓉、天雄、薯蕷（他二味は判別不能）
	86	治惡病大風方	雄黃、丹沙、礬石、茲（慈）石、玄石、硝石、人參
敦煌漢簡	2012	治久咳逆胸痺痿痺止泄心腹久積傷寒方	人參、細辛、薑、桂/蜀椒、烏喙、紫菀、菖蒲
居延漢簡	89.20	傷寒四物方（原文に「方」字はない）	朮、細辛、桂/烏喙

には礦物性藥物として、「侯氏黑散」の礬石、「紫石英方」の禹餘糧（太一餘糧と同じか、或いは似た效能を持つもの）、「石散」に共通の赤石脂が入っている。

最後に、武威漢簡の第八六簡は「惡病大風」を治療する處方であり、『金匱要略』に記された「侯氏黑散」の藥效「治大風四肢煩重、心中惡寒不足者（大風に罹って四肢が重く、身體中惡寒がして虚弱な症狀を治す）」と類似しており、その處方には『抱朴子』金丹篇で擧げられている「五石」が、曾青以外は含まれている。なお、『抱朴子』での「白礬」が武威漢簡では「礬石」となっており、これも文字の混同か、或いは本來そうであったかは判断できない。「大風」については『素問』長刺節論に「病大風、骨節重、鬚眉墮、名曰大風。（大風を病めば、關節が重く、鬚や眉が抜け、これを名付けて「大風」という。）」とあり、『千金要方』卷二十三の痔漏方では、「惡疾大風第五」という一節を割いて「惡病大風」について説明している。その描寫は『金匱要略』の「侯氏黑散」や『素問』の描寫と合致する。また、武威漢簡の「治惡

病大風方」は末尾において「皆落、隨皆復生、■雖折能復起、不仁皆仁。（抜け落ちたものはまた全部生え、不隨になっても再び起き上がることができ、麻痺が全て取れる。）」と、豫後について記している。ここで、『針灸甲乙經』の皇甫謐序に見られる王仲宣の事例を振り返ってみると、その症狀が類似していることに氣附かされる。「治惡病大風方」が「五石」に類似した藥物から構成され、張仲景が勧めたのも「五石湯」であったことから、兩者の間には何かしらの關連があったと推測できよう。

以上の考察から、張仲景以前から「寒食散」の雛形となるものが存在し、それらは或いは傷寒を治療し、或いは男子の五勞七傷を補益する處方であった。傷寒に罹れば體は虚弱になり、咳や熱など表面上の症狀を抑える以外にも、虚弱になった體を補益せねばならないため、それらの處方を組み合わせ、藥物を取捨選擇しつつ張仲景が用いたとされる「寒食散」が創りあげられていったのではなからうか。

(二)「寒食散」の流行

治療のために張仲景が用いたと思われる「寒食散」を、一種のサプリメントとして廣め流行させたのは誰か。その張本人を何晏とすることは諸研究の同じとする所である。⁽¹⁸⁾余嘉錫の考證によれば、何晏は張仲景の「侯氏黑散」と「紫石英方」から編み出された「五石更生散」を使用し、それが後に流行った「寒食散」である。川原秀城の説によれば、萬能藥の性質を持つ「五石護命散」が編み出されたことにより、それが更に流行したということである。⁽¹⁹⁾何晏の常軌を逸脱した事績や、「寒食散」を服用した士大夫、文人の逸話は語り盡くせぬほど多く、いずれも興味深いものではあるが、それらは既に先行研究に詳しく、本稿の論旨からも外れるので、ここでは割愛する。「寒食散」の效用とされるものは前述した通りであるが、その副作用も、體が熱くなり、厚い衣類を着ることができなくなり、皮膚が爛れ、風呂には入れなくなり、そして、酒だけは熱いものが良いが、冷えたものを飲食せねばならない等々、枚舉するに暇ないほど多く、

また激しいものであった。その副作用が現れ、そして治つていく過程は「散發」と呼ばれ、散發のために歩き回ることが「散步」の語源となつている。

副作用に苦しむ人々を治すために、當時の醫者や醫術に通じた者は様々な試みをしたに違いない。その心得から「寒食散」の藥理、用法、及びその副作用への對處法を整理した著述が多く記されたことは、第一章第二節で述べた通りである。次章では、それらの内容について考察し、その醫學的展開を探つていく。

三、諸家の「寒食散」に關する論述と

その醫學的展開

(一) 皇甫謐『論寒食散方』

何晏が「寒食散」を流行らせた後、最も早い時期に「寒食散」に關して論を打ち立てたのが皇甫謐である。

皇甫謐は『帝王世紀』、『針灸甲乙經』などの著作があり、歴史學にも醫學にも通じているとともに、『晉書』の記述などに見られるように、⁽²⁰⁾自らも「寒食散」の副作用に

苦しんだことがある。余嘉錫の考證によれば、奇しくも

それは丁度何晏が殺された年にあたる。「寒食散」が流行して聞もない頃に皇甫謐が立てた「寒食散」の理論は、後の「寒食散」に關する考え方に大きな影響を與えた。

皇甫謐の論は、『諸病源候論』卷六「解散病諸候」に「皇甫云」の後に次いで、長くまとまった形で引用されており、『醫心方』卷十九の「服石節度第一」から「服石禁忌法第六」にわたり、「皇甫（謐）云」、「皇甫謐節度論云」、「皇甫謐（發動）救解法」及び「皇甫謐薛侍郎寒食藥發動證候四十二變竝消息救解法（實際は五十一變ある）」の後に次いで、分散された形で引用されている。兩者の内容はほぼ同じであり、文字には異同がある。この他、『千金翼方』卷二十二「飛煉」の「飛煉研煮五石及和草藥服療第二」と「服諸石藥及寒食散已、違失節度、發病療之法合四十五條第三」、及び『外臺祕要』卷三十七「餌寒食五石諸雜石等解散論竝法四十九條」に少し變更が加えられて引用されており、皇甫謐の文だと明確には記されていないが、その内容の高い類似性から同じも

のであると判断できる。

皇甫謐の記述は最初、「寒食散」の出現、「寒食散」の流行した経緯及びその藥害を被った實話、自らが「寒食散」について著述を行うことになった経緯について述べている。假に皇甫謐『論寒食散方』が存在するとしたら、この部分は序文に相當するはずである。次に「寒食散」の服用法（量と時間、注意事項）を述べ、更に人の體質の違いにより「寒食散」の藥效も異なるため、それぞれの體質や症状、體の狀況に合った服用法が記されている。その次に「寒食散」の副作用とその對處法が記され、主に體を冷やすことを對處法としている。その次に節度を誤った場合の副作用やその原因・對處法について事細かに述べており、全部で五二條に上る。（『諸病源候論』に挙げられたものを数えれば全部で五一條あるが、四四番目と五一番目とがほぼ重複しており、『醫心方』の二六番目と四二番目が『諸病源候論』には記されていない。）最後に、「寒食散」の治療法は常理に悖り、醫者として仁の心を以て事に當たることを説き、六反（六つの常理に反する

こと)、七急(七つの急ぎ行うべきこと)、八不可(八つの行なつてはならないこと)、三無疑(三つの疑つてはならないこと)を述べて締め括つてゐる。なお、『醫心方』の「服石反常性法第二」における引用が『諸病源候論』の最後「六反、七急、八不可、三無疑」の部分にあたり、「服石發動救解法第四」が節度を誤つた場合にあたり、それ以外(「服石節度第一」、「服石四時發狀第五」、「服石禁忌法第六」)の引用は『諸病源候論』には見られない。

副作用の症狀の原因として、食べるタイミングや體を動かすタイミングを逃し、或いは暖かいものを食べてしまつたり、じつとして熱が溜まつたりしたことが挙げられ、その對處法としては、冷食を食べる、冷水を浴びるといった冷やす方法や體を動かす方法、腹を下す方法や溫酒を飲む方法などが、全體を通して挙げられている。以下に節度を誤つた場合の副作用の幾つかについて分析を行うが、紙幅に限りがあるため、原文は示さず『諸病源候論』における順番で示す。

一、二二番目の記述では、どちらも症狀は目に出てお

り、その原因としては肝に熱があると分析されている。これは、中醫學における肝臟と目の對應を踏まえて⁽²¹⁾と考えられる。

十三、十七、十八、二二、二九、四一番目の記述では、藥氣がそれぞれ膈(症狀としては胸脅氣逆)、肌膚(五臟と脈に關する記述もある)、脈と絡、胃と大腸、皮膚の内、百脈に影響して、症狀が出るものだと原因づけてゐる。症狀が出てゐる部位と原因となつてゐる部位の關係性は、殘念ながら醫學文獻の中からは明確に判斷できないが、皇甫謐は臟器や脈との對應から、「寒食散」の症狀を分析しようとしたのではなからうか。

また、四一、四二、四六番目の記述では、人の眞氣、正氣と藥氣とについての分析があり、皇甫謐は氣のバランスについても考慮に入れていたと考えられる。

『醫心方』の二六番目の記述は、『諸病源候論』においては皇甫謐の文として記されてはいないが、「寒食散發候」の冒頭の内容がそれと酷似しており、皇甫謐によるものだと判別できる。内容としては、脈と五行の概念を

取り入れており、脈學において、脈の状態を形容するのによく見られる表現「洪實」、「斷絶」、「細數」、「強快」を症状（證）として擧げている。ただ、その原因や對處法は「寒食散」獨特のものと思われる。『醫心方』の四二番目の記述は、夢に驚いて動悸を起す症状と五行とを結びつけており、これにも『内經』の影響があったと考えられる⁽²²⁾。

以上、經絡、臟腑、五行及び氣の概念と「寒食散」による症状との關係について考察を行ったが、湯液による對處法も、數種類見られる。

十六番目に「消酥若膏」、三十番目に「白酒麩」が見られるが、他の文献記載がないため、これらの薬の正體については判然としない。「消酥若膏」は『千金翼方』では、「消酥蜜膏」として引用されている。「酥」や「蜜」は『四分律』や『十誦律』などの早期の佛典に見られ、⁽²³⁾恐らく西域からもたらされたばかりのものであり、皇甫謐はその薬用や副作用についても理解していたことがわかる。

十九と三五番目に「梔子湯」、二五番目に「梔子豉湯」、二六番目に「三黃湯」が見られる。前二者はいずれも『傷寒論』に見られ、「三黃湯」は『千金要方』に「仲景三黃湯」として擧げられているため、⁽²⁴⁾三者とも張仲景の手によるものと考えて良いと思われる。「梔子豉湯」の他、『傷寒論』には「梔子厚朴湯方」、「梔子乾薑湯方」などが見られ、「梔子湯」はその總稱として用いられている。⁽²⁵⁾この「梔子湯」及び「三黃湯」がいずれも主に中風を治療するためのものであることに注目したい。『晉書』皇甫謐傳の描寫「久嬰篤疾、軀半不仁、右腳偏小、十有九載。」によれば、皇甫謐は正に中風を患っていたのではないかと推測される。⁽²⁶⁾「梔子湯」と「三黃湯」を用いた對處法は皇甫謐自身の體驗によって編み出された可能性が大きい。

皇甫謐自身による體驗の他、他人を診療したその形跡も（失節之人、多來問余）、症例の中に見られる。例えば三九番目の症例では、冷やし過ぎた場合について述べるが、その後「河東裴季彦」、すなわち裴秀の事例を記

している。この事例は『晉書』裴秀傳に「服寒食散、當飲熱酒而飲冷酒、泰始七年薨、時年四十八。」と記されている。

以上から、皇甫謐は自分自身の體験や他人を診療した體験をもとに、「求諸本草、考以素問」の通りに、既存の中醫學の概念（經絡、臟腑、五行、氣、處方など）を取り入れつつ、「寒食散」の副作用の對處法を編み出した。その後世に與えた影響は大きいと言えよう。

（二）曹欽『論寒食散方』

曹欽は上述したように魏の人で、廩丘公とも呼ばれ、その『論寒食散方』は皇甫謐のものとはほぼ同時に世に出たものである。この他、『外臺祕要』に『廩丘公療下痢三十年方』が引用されており、曹欽も醫術に通じていたことがわかる。

曹欽の『論寒食散方』は『醫心方』卷十九の「服石節度第一」、「服石發動救解法第四」及び「服石禁忌法第六」に「曹欽論云」、「曹欽救解法云」に續いて引用され

ている。

内容の構成としては、まず藥の副作用と寒熱のバランスについての概論を述べ、それに續いて「寒食散」の副作用とその對處法について概論を行なっている。その主張としては、皇甫謐が冷やすことを中心としていたのに對し、人はそれぞれに體質を異にしているため、その對處法（體を冷やす、酒を飲む、飲食を増やす、體を動かすなど）も、その體質にあつたものでなければならぬことを強調している。この部分に次いで、「可疑之候」と「溫治之治」という二つの概念を打ち出し、更に説明を行なっている。「可疑之候」では、「中冷（寒さにあつて風邪を引く）」と「藥熱（藥の副作用で熱が出る）」の症狀が似通っているケースを分析し、前者は溫め、後者は酒で和らげるとしている。「溫治之治」では、散發に際して取り敢えず冷やすことで對處する世間一般のやり方を批判し、無理に冷やすのではなく、厚着して體を動かす、汗をかくことによつて熱を放出するという自らの經驗を述べ、虛弱體質の者が薄着したり、冷やし過ぎたり

すると、傷寒に罹ってしまう危険性があると述べている。

「曹欽救解法」として引用されている部分は薬の副作用とその対処法を述べている。中には皇甫謐の『論寒食散方』と内容的に一致する部分も見られる。全體的には、やはり冷やす場合が多いが、體を動かして、暖かくなつてから沐浴する対処法や下す対処法も少なからず見られる。また、皇甫謐の論にあった「梔子湯」も多くの症状に用いられている。

最後に、「服石禁忌法第六」に引用されている部分は、「寒食散」を服用した後に忌避すべきことを挙げているが、これも『醫心方』の同じ箇所にかかれていて皇甫謐の説と似ているものが多い。

以上から、曹欽の説は、多くが皇甫謐のものと同類しているが、冷やし過ぎず、體質に合った対処を強調し、「中冷」と「藥熱」を見定めるべき点とした点では皇甫謐とは異なる。また、同じ内容であっても、曹欽の方が記述方法は簡略化されており、皇甫謐が廣く諸法を取り入れたのに對して、曹欽は問題意識を持って自説を立て

たものだと思われる。

(三) 道洪「寒食散對療」

道洪が如何なる人物であったかは定かでないが、『寒食散對療』は前述した通り『小品方』に引用されているため、『小品方』自體よりは前に成立したことになる。葛洪の『肘後備急方』といずれが先かは判断できない。

道洪の『寒食散對療』は『諸病源候論』卷六「解散病諸候」に「江左有道弘道人、深識法體、凡所救療、妙驗若神、制『解散對治方』として引用され、「寒食散」の副作用を治療するための藥方を記している。ただ、その調合方法については記されていない。『千金要方』卷二四「解毒雜治方」の「解五石毒第三」には、道洪の名を冠してはいないが、それぞれの處方に分散して引用されている。最もまとまって整理された形としては、『外臺祕要』卷三七の「乳石陰陽體性並草藥觸動形候等論並法一十七首」に引用されている。その他、『醫心方』卷十九の「服石發動救解法第四」に「道弘解散法」としても

引用が見られるが、内容は全く異なる。

道洪の『寒食散對療』は皇甫謐や曹欽のものとは一線を畫し、全く新しいものである。二つの藥物を組み合わせて使うことにより、その相乗効果や毒消し作用を狙うことを「藥對」と呼ぶが、道洪はこの方法を用いている。陶弘景『本草經集注』に『藥對』なる書物の引用が見られ、また、北齊の徐之才による『雷公藥對』が『新唐書』藝文志に見えるが、『寒食散對療』はこのいずれよりも早い。道洪が「藥對」という概念の先驅けであったと考えることもできるが、道洪がここで挙げた對は副作用に關するもので特殊であり、また『神農本草經』に記されている「相反」や「相畏」などの關係でもない。『外臺祕要』で「道洪所傳、何所依據云。(道洪の傳えたものは、何に依據しているのだろうか。)」と述べているように、その基づく所は全く不明である。

道洪は、「寒食散」に含まれる藥物を對で挙げ、その相乗効果により副作用がもたらされると考えている。また、一對のうち、片方がもう片方に働きかけることによ

り副作用がもたらされるが、働きかける側が異なればその副作用も異なる。『諸病源候論』に引用されている道洪が挙げた對は以下の通りである。鍾乳と朮、栝藂が對であり、その藥效は主に肺に働き、硫黃と防風、細辛が對であり、その藥效は主に脾と腎に働き、白石英と附子が對であり、その藥效は主に胃に働き、紫石英と人參が對であり、その藥效は主に肝に働き、赤石脂と桔梗が對であり、その藥效は主に心に働きかける。皇甫謐の論より更に進んで、ここに五臟(胃は六腑)全てが網羅されたが、症狀やその原因となった藥物と臟腑の對應關係は依然として不明瞭である。この他、五臟の關係について記していないものもあり、繰り返しとなった對もあるが、それ以外では、附子と赤石脂、桔梗と茯苓、牡蠣の對が記されている。また、對の關係ではないが、互いに働きかけるものとしては鍾乳と海蛤、防風と紫石英があり、いずれの藥物とも對とはならないものとして乾薑がある。ここに挙げられている藥物から、道洪が扱っていた「寒食散」の處方が推測できる。それは「五石更生散」に

「侯氏黑散」の牡蠣と茯苓を加え、桂心を除いたものである。

「寒食散」の副作用による諸症状の原因は全て薬對の互いの働きかけに歸納され、それぞれの症状に對する處方も記されている。肺に起因する場合は「蔥白豉湯」、脾と腎に起因する場合は「杜仲湯」、胃に起因する場合は「生麥門冬湯」、肝に起因する場合は「麻黃湯」、心に起因する場合は「大麥麩良」〔『千金要方』では「大麥麩湯」を服用する。

また、『醫心方』に引用された「道弘解散法」では、腐りかけの食物を食べた、生のご飯或いは酒を攝った、肉を食べ過ぎた、生野菜を食べた、米をよく嘔まずに食べた、食べ過ぎた、食べずに飢えた、酒に酔った、酷く怒った、冷やし過ぎた、温め過ぎた、こうした節度を失した場合に服用すべき處方を簡潔に記している。皇甫謐以來多用される「梔子湯」や、上述した五つの處方以外に、「藜米」、「甘草湯」、「理中湯」、「人參湯」、「黃芩湯」といった處方が見られる。

「寒食散」の中醫學的展開に關する一考察

以上から、道洪は「藥對」の概念を用いて「寒食散」の副作用を説明し、臟象理論に結び付けようと試みた痕跡が見られ、そして、處方による對處法をより系統的に整理した。これは、それまでの寒食散の副作用への對處法として畫期的な試みであったが、藥理からどうしてそのように對をなすのか、そして、五臟と處方との對應に關して、それが踏まえた醫學理論は『內經』や『傷寒論』など、それまでの文献には見られない。

(四) 葛洪『肘後備急方』

葛洪の『肘後備急方』では「治服散卒發動困篤方第二十二」において「寒食散」について記している。全體としては皇甫謐の理論を著しく簡略化し、症例も皇甫謐が挙げたものを踏まえている。特徴としては、副作用への對處法として、下すことを主眼に置いている點であり、そのための處方を三つ挙げている。ただ、この三方の名稱は記されていない。一つ目は梔子と豉を用いる處方で、これは皇甫謐以來、對處法としてよく用いられてきた

「梔子豉湯」に他ならない。葛洪は更にこれに改良を加え、甚だ熱く、潰瘍ができた者に對しては「梔子豉湯」に黄芩を二兩加えるよう指示している。二つ目と三つ目は新しく見られるもので、保存が效き、常備できるものである。二つ目は六味の藥物を粉狀に碎いて保存するもので、それを服用する際は、水が半量になるまで棗を煎じ詰めた煮汁に、保存したものを五方寸匕（五藥さじ分）入れ、火にかけて三回かき混ぜたものを、三回に分けて服用する。三つ目は五味の藥物をすりつぶして蜂蜜を加え、丸藥にしたものである。こうした保存が效く處方を載せた理由については、「寒食散」を服用して節度を失した場合、既存の治療法に従って治さなければならぬが、それはやんごとなき人々に多用されるもので、貧しい者が「寒食散」を服用しても、體が冷え疲労しているため、副作用はほとんど見られず、ただ、緊急事態に陥つた時に急死しないよう備えておくためである、と記している。

以上から、葛洪は、理論においては、皇甫謐を踏襲し

つつ、下すことに重きを置き、對處法においては「梔子豉湯」に改良を加え、新しい處方も創出した。

（五）陳延之「小品方」

『小品方』における「寒食散」に關する言及は、『醫心方』卷第十九「服石節度第一」に「陳延之論云」、『諸病源候論』卷六「解散病諸候」の「寒食散發候」に「小品方」、そして、『外臺祕要』卷三十七「餌寒食五石諸雜石等解散論並法四十九條」に「小品論云」として引用されている。

『醫心方』の引用部分は陳延之の「寒食散」に對する論述であり、『諸病源候論』の引用部分は道洪の『寒食散對療』に對する批判である。また、『外臺祕要』の引用部分はその題名から推測されるように、皇甫謐が擧げた節度を誤つた場合の副作用に關する記述をほぼそのまま踏襲しており、更にその一部に對處するための處方を各條の後に附している。

陳延之の「寒食散」に對する論述は、金石の精華の氣

が、氣血が少ない患者の體内に溜まっていくと指摘している。更に、その効用が発揮されず、體が寒いままだと、服用したものは效力を得られなかったと勘違いし、後で散發が起こつた際も氣附かず、對處法に従わないうで被害に遭うと指摘している。道洪の『寒食散對療』に對する批判では、まずその處方の效果に疑義を呈し、それを簡単に信用してはならないと指摘し、更に『神農本草經』にも、皇甫謐の論にも、曹欽の論にも「藥對」の概念が見られず、『神農本草經』に見られる栝藹と乾薑との「相惡」の關係も辨えていないことから、「藥對」の概念は信用するに足りず、従つてはならないとした。その末尾で「寒食散」の處方から栝藹を除くか、或いはそれぞれの症狀に合わせて、他の藥物に變更すべきだとしている。

(六) 慧義『寒食解雜論』、及び孔恂、夏侯氏、秦承祖の記述

慧義の『寒食解雜論』は『醫心方』卷十九の「服石節度第二」と「服石發動救解法第四」にそれぞれ「釋慧義論云」、「釋慧義薛侍郎藤熨救解法」として引用されており、この他、様々な處方の作者として分散されて引用されている。彼は「寒食散」のメリットを強調し、副作用があるのは、服用する者が節度を失したからであつて、「寒食散」自體のせいではないと指摘した。また、皇甫謐の説を冷やすのみ、曹欽の説を温めることだと評價し、藥は熱性であるため、冷やした方がよく、このため皇甫謐の説が遍く世に行われたと結論づけている。「浴熨救解法」では沐浴の方法と、熨す方法を述べている。この他、鍾乳に起因する頭痛には熱い酒を飲んで對處すること、「解散麥門冬湯方」、「解散治目疼頭痛方」、「散發熱氣衝目漠漠無所見方」についての記述が散見され、「解散麥門冬湯」以外は新出のものである。いずれも皇甫謐が擧げた症狀であるが、ここでそれに對する處方が明らか

かとなった。

孔恂は前述した通り西晉の人であるが、『醫心方』に僅かだけ引用されているため、便宜のため順序を入れ替えた。彼の「寒食散」に對する理論は、冷やし過ぎてはいけなとする曹欽の説を引き繼いだものである。

夏侯氏の説は『醫心方』卷十九の「服石節度第一」と「服石發動救解法第四」に二回引用されたのみである。

彼は「寒食散」を飲むタイミングとして、病狀が進行している時ではなく、病狀が快方に向かつている時に服用すべきだとしている點が獨特である。なぜなら、「寒食散」は正氣を輔けるもので、病狀が進行している時は病の氣が強く、正氣が弱いためにそれを制することができず、逆に、病狀が快方に向かつている時は正氣が強くなり、それを助ければ病の氣を凌ぐことができるからである。

秦承祖は前述した通り、『世說新語』劉孝標注の引用により『寒食散論』があるとわかる。それは『醫心方』卷十九の「服石節度第一」に引用されている。秦承祖も

慧義同様、「寒食散」のメリットを強調するとともに、それは諸刃の劍であるとしている。また、皇甫謐と曹欽の説も同様に、それぞれ冷やす、温めると評價している。ただ、この二説相反の現象に對しては、どちらかに固執するのではなく、藥性を深く考慮し、患者の症狀を斟酌すべきだとした點は慧義とは異なる。

(七) 許孝崇、薛曜、龐氏の記述

許孝崇、薛曜、龐氏の説はいずれも『醫心方』卷十九にのみ、一から二箇所程度の引用があるのみで（薛曜の引用は多いが「寒食散」に對する言及であるかどうか定かでないものが多い）、前二者は唐人であり、龐氏は正體不明である。

許孝崇は、副作用の對處法としては冷やすことを踏襲し、また、適宜發散させなければ、藥の氣が體內に溜まり、後で散發が起こった際も氣附ないことがあるとした點では、陳延之の考え方を引き繼いでいる。

薛曜は、『醫心方』の他の部分において、多く服石に

関連する處方が引用されており、『外臺祕要』に「薛侍郎服乳石體性論」と「銓擇薛侍郎等服石後將息補餌法」と見えることから、服石について詳しい者であることがわかる。彼は「寒食散」について、節度も守り、薬理を辨えることが大切であると強調し、その副作用への対処としては、古法に固執しなくとも良いと主張している。

龐氏の説は、「服石節度第一」と「服石發動救解法第四」に引用されており、後者は皇甫謐の論に挟まれる形で引用されている。「服石節度第一」における引用では、「寒食散」の散發は陰の氣が體外にあり、陽の氣が體内にある秋冬に起こることが多く、陽の氣が薬の熱性を増長させるからだと指摘している。他はほぼ皇甫謐の説と同じで、それを簡略に述べており、感情面に關する記述が多い。「服石發動救解法第四」における引用は様々な症例を擧げるのみで、前後で皇甫謐が擧げている症例とも關連性が見られない。

四、おわりに

本稿は傳世の醫學文獻に引用された「寒食散」に關する論説を、できる限り時代順に並べ、その醫學的展開を分析しようと試みた。「寒食散」の處方と出土文獻に見られる様々な處方とを比較することを通して、前漢から後漢にかけて、既に「寒食散」の雛型が存在していたことも明らかにした。張仲景が傷寒の治療に使用したと思われる「寒食散」に、何晏が手を加えて流行らせた後、間もなくして皇甫謐がそれまでの中國醫學理論を様々な援用しつつ、「寒食散」の用法、副作用、及びその對處法について整理した。ほぼ同時期の曹欽は、皇甫謐が冷やす方法をメインとしたのに對し、患者の體質によつて適度に冷やす「溫治」の方法を取り、孔恂がそれを踏襲した。佛僧の道洪は「藥對」の概念を打ち出し、「寒食散」の副作用を新しい體系により説明し、それぞれの症狀に對する處方も多く提示した。東晉に入り、葛洪は、皇甫謐を踏襲しつつ、下すことに重きを置き、それまで

の處方に改良を加え、常備するための新處方も創出した。次いで、陳延之は金石の氣が體内に溜まることで副作用が引き起こされると指摘し、道洪の説を批判し、更に幾つかの新處方を編み出した。東晉から劉宋にかけての佛僧慧義は「寒食散」のメリットを強調し、曹欽の「溫治」を否定して、皇甫謐に贊同し、また更に様々な新處方を創った。夏侯氏は正の氣と病の氣の關係という視點から、患者の正の氣が病の氣を押し返す、快方に向かうタイミングで、正の氣を輔けるために「寒食散」を服用すべきだと唱えた。梁の秦承祖は慧義に類似した觀點を持ち、皇甫謐と曹欽のどちらかに固執するのではなく、藥性と症狀を斟酌して對處すべきだと主張した。唐代に入り、許孝崇は以前の説を引き継ぎ、特に陳延之の影響が大きいと思われる。薛曜は服石に詳しいと思われるが、「寒食散」に關しては前説と類似する内容が多く、また古い方法に囚われないことを主張している。龐氏の正體は定かでないが、陰陽の氣と「寒食散」の藥性を關連づけて、秋冬に服用するのが良いと指摘した。

「寒食散」が流行してからしばらくは、皇甫謐、曹欽、孔恂の論に見られるように、「寒食散」の藥性と副作用に對して、醫學の考え方を取り入れつつも經驗則に基づいた對處法が模索され、道洪に至って新しい考え方による整理と藥方による對處法が提唱され、それに續く葛洪、陳延之、慧義は、それまでの説への評價を行いつつ、藥方の改善や創出に努めた。後の夏侯氏、許孝崇、薛曜は、それぞれに創見があったものの、それまでの説を超えるものは見られない。

「寒食散」が何晏によつて廣められ、その效用がもてはやされて以降、その副作用に何とか對處しようとする論説は多くあつたが、その藥害を強調したものはあまり見られなかつた。唐代に至り、薛曜のように服石を肯定的に捉える者も依然存在したが、孫思邈が『千金要方』において、「寒食散」の藥害を痛烈に批判した。孫思邈の批判が直接人々の認識に影響を與えたかどうか確證はないが、「寒食散」の流行は唐代において途絶えた。

註

- (1) 魯迅「魏晉風度及文章與藥及酒之關係」(『而已集』、人民文學出版社、一九二七年)。余嘉錫「寒食散考」(『余嘉錫論學雜著(上冊)』、中華書局、二〇一二年)。
魯迅は社會文化史的な觀點から分析し、余嘉錫は膨大な史料を用いて精緻な考證を行った。
- (2) 吉川忠夫「中國古代人の夢と死」第二章「寒食散と仙藥」(平凡社、一九八五年)、赤堀昭「寒食散と養生」(坂出祥伸「中國古代養生思想の總合的研究」、平河出版社、一九八八年)など、寒食散と煉丹術や養生との關係を論じた研究や、岸田知子「王羲之と藥」(『密教文化』、一七二號、一九九〇年、七一〜八六頁)、佐藤利行「王羲之と五石散」(『廣島大學大学院文學研究科論集』、六五卷、二〇〇五年、一〜十三頁)など、文人と寒食散との關係を論じた研究などがある。また、川原秀城「寒食散と魏晉南北朝の風氣」(『毒藥は口に苦し』中國の文人と不老不死」第四章、大修館書店、二〇〇一年)など總合的な研究もある。
- (3) 本文における引用では、(東晉)葛洪「肘後備急方」(原刊道藏輯要本)、(隋)巢元方「諸病源候論」(日本影鈔宋本)、(唐)孫思邈「千金要方」(元刊黑口十二行本)、(唐)孫思邈「千金翼方」(清同治戊辰七年掃葉山房藏板)、(唐)王燾「外臺祕要方」(明崇禎庚辰新氏程氏經餘居刊本)、(日本)丹波康賴「醫心方」(內閣文庫本)を参照した。
- (4) 『隋書』卷三十四、經籍志三、子部、醫方、宋刻遞修本。引用番號は興膳宏・川合康三「隋書經籍志詳攷」(汲古書院、一九九五年)を参照した。
- (5) 楊學娟、田富軍「皇甫謐「依諸方撰」與「內經倉公論」新考」(『南京中醫藥大學學報』十九卷第二期、二〇一八年、八九〜九三頁)に詳しい。
- (6) 『魏書』(宋紹興本)卷二十、武文世王公傳、「東平靈王徽(中略)子翁嗣(後略)」に對する裴松之注「翁入晉、封虞丘公。(中略)翁撰解寒食散方、與皇甫謐所撰竝行於世。」
- (7) (梁)慧皎「高僧傳」(中華書局、一九九二年)卷七に「釋慧義、姓梁、北地人、少出家。(中略)宋元嘉二十一年(四四四年)終於烏衣寺。春秋七十三矣。」と見える。
- (8) 『全唐文』(上海古籍出版社、一九九〇年)卷二三九に「曜、書令薛元超子(中略)與修「三教珠英」、官正諫大夫。(薛曜は、中書令薛元超の子であり(中略)ともに「三教珠英」を編纂し、官職は正諫大夫であった。)」とあり、この後に「服乳石體性論」が引用されている。
- (9) 『唐會要』(藝文印書館、一九六九年)卷八十二に、顯慶二年(六五七年)、尚藥奉御の許孝崇らが敕命を受

けて、陶弘景の『本草』を増補して圖を加え、五十五卷の書物を編纂した事績が見られ、『新唐書』（中華書局、一九七二年）藝文志に載る『圖經』七卷の後に、『本草』、『目錄』、『藥圖』及び『圖經』を編纂した撰者が記されており、多くが『唐會要』の記述と一致し、許孝崇もそこに名を連ねている。

(10) 『魏書』（中華書局、一九七二年）任蘇杜鄭倉傳の倉慈傳に對する裴注に「案孔氏譜。孔文字元儒、孔子之後。（中略）子恂字士信、晉平東將軍衛尉也。」とある。

(11) 丹波元胤『醫籍考』（學苑出版社、二〇〇七年）卷十四、方論十九に「夏侯氏（闕名）藥方、七錄、七卷、佚」とあり、その考證によれば、『夏侯氏藥方』なる書物が『七錄』に記載されていた。

(12) 凡是五石散、先名寒食散者、言此散宜寒食、冷水洗、取寒、唯酒欲清、熱飲之。不爾、即百病生焉。

(13) 齊王侍醫遂病、自練五石服之。臣意往過之、遂謂意曰、「不肖有病、幸診遂也。」臣意即診之、告曰、「公病中熱。論曰、『中熱不溲者、不可服五石。』石之爲藥精悍、公服之不得數溲、亟勿服、色將發靡。」

(14) 然寒食藥者、世莫知焉、或言華佗、或曰仲景。考之於實、佗之精微、方類單省、而仲景經有侯氏黑散・紫石英方、皆數種相出入、節度略同。然則寒食草石二方、出自仲景、非佗也。

(15) 仲景見侍中王仲宣時年二十餘、謂曰、「君有病、四十當眉落、眉落半年而死、令服五石湯可免。」仲宣嫌其言忤、受湯而勿服。（中略）後二十年果眉落、後一百八十七日而死、終如其言。（皇甫謐原撰、林億等校正、李雲重校『黃帝三部針灸甲乙經新校』學苑出版社、二〇一二年、三頁）

引用部分は皇甫謐の手による序文とされるが、『針灸甲乙經』の撰者及び「皇甫謐序」とされる文章の作者は定かではない。詳しくは、真柳誠『黃帝醫籍研究』（汲古書院、二〇一四年）の第四章第二節を参照されたし。

(16) 吉元昭治「中國傳統醫學と道教（第二十三回）五石散」（『日本醫史學雜誌』第四九卷第一號、二〇〇三年、七四〜七五頁）。吉元氏はこの混同が災いして、中毒現象が引き起こされた可能性があると示唆している。他に、王奎克「五石散新考」（趙匡華『中國古代化學史研究』、北京大學出版社、一九八五年、八〇〜八七頁）では、「侯氏黑散」には、「礬石」ではなく、「礬石」が入っていたと主張している。兩者とも「礬石」はヒ素を含む礦物であり、これを服用することで中毒現象が引き起こされると指摘している。

(17) 表を作成するに際しては、張雷『秦漢簡牘醫方集註』（中華書局、二〇一八年）を参照した。

(18) 『世說新語』（四部叢刊本）言語篇に「何平叔云、「服

五石散非唯治病、亦覺神明開朗。」(何晏は「五石散を服用するのは病氣を治すだけでなく、精神も明朗になる。」と言っている。)とあり、それに對する劉孝標注に「秦丞相(相)は「祖」の誤り)『寒食散論』曰、「寒食散之方、雖出漢代而用之者寡、靡有傳焉。魏尚書何晏首獲神效、由是大行於世、服者相尋也。(秦丞相『寒食散論』に「寒食散の處方は漢代から現れたものであるが、それを使用する者は少なく、そうした話もあり聞かない。魏の尙書たる何晏が初めて素晴らしい效き目を得、それから世間では大いに流行り、服用する者が相次いだ。)」とあるのが、傳世文獻のうちで寒食散について記した最も早いものである。先行研究ではいずれもこの文獻を引用して説明を行なっている。

(19) 註(2)における川原秀城氏の著書、一二八頁〜二九頁を参照されたし。

(20) 『晉書』皇甫謐列傳に「皇甫謐、字士安、幼名靜安、定朝那人。(中略)初服寒食散而性與之忤、每委頓不倫、嘗悲恚叩刃欲自殺、叔母諫之而止。(皇甫謐、字は士安、幼名は靜安、定朝那の人。(中略)初めて寒食散を服用したが體質と合わず、いつも憔悴して氣持ちが落ち込むことこの上なく、苦しさのあまり刀を抜いて自殺しようとしたこともあったが、叔母が諫めて止めてくれた。)」とある。

(21) 例えば、『素問』(顧從德影宋刻本)「金匱真言論」に「東方青色、入通於肝、開竅於目、(後略)」とあり、「陰陽應象大論」に「東方生風、風生木、木生酸、酸生肝、肝生筋、筋生心、肝主目。(後略)」とある。

(22) 『素問』の「脈要精微論」「方盛衰論」、及び「靈樞」の「淫邪發夢」に夢と五臟の對應が見られるが、「五行」というキーワードは直接見られない。

(23) 例えば、『四分律』卷三九の「衣撻度之二」に「時著婆、淨除頭中病已、以酥蜜置滿頭中、已、還合鬪髻縫之、以好藥塗、即時病除肉滿、還復毛生、與無瘡處不異。」とあり、『十誦律』卷五八の「問七法中間藥法第五」に「優波離問佛『若以酥油著酒中、可飲不。』答『比丘若病得飲、不病不得飲。』即日受時藥・時分藥・七日藥・盡形壽藥、共和合一處、中前應服、時藥力故、過中不應服。」とある。『四分律』の描寫は、症狀としては十六番目の症狀とは異なるが、頭皮の病氣を治すものであることがわかり、また、『十誦律』の描寫(引用部分以外にも多數ある)によれば、「酥」も病がある時のみ服用し、節度を守る必要があることがわかる。以上のことから、「消酥蜜膏」は「酥」や「蜜」の副作用を打ち消すものではあるまいか。

(24) 『千金要方』卷二七「治諸風方」の「偏風第四」に「仲景三黃湯、治中風、手足拘攣、百節疼痛、煩熱心亂、

惡寒、經日不慾飲食方。／麻黃（三十銖）、黃芩（十八銖）黃耆、細辛（各十二銖）、獨活（二兩）。とある。

(25) 『傷寒論』辨太陽病脈證并治を參照されたし。

(26) 『金匱要略』（四部叢刊本）の「中風歷節病脈證并治」に「夫風之爲病、當半身不遂、或但臂不遂者、此爲痺。」とあり、そのすぐ後に、寒食散の雛型の一つと思われる「侯氏黑散」に關する記述がある。

執筆者紹介

竹宮英朗

東京大學人文社會系研究科
博士課程

呂夢雨

國際基督教大學アーツ・サイエンス
研究科比較文化專攻博士後期課程

永塚憲治

公益財團法人研醫會研究員

宮崎順子

關西大學非常勤講師

都築晶子

龍谷大學名譽教授

森由利亞

早稻田大學教授

A Study on the Medical Thought of Cold-Food Powder 寒食散

TAKEMIYA Hideaki

It is well known that during the Wei Jin and North and South Dynasties period 魏晉南北朝, many scholar-officials and literati took Cold-Food Powder, and many of them suffered from it. In this paper, I focus on the medical ideology of Cold-Food Powder and try to make up for the deficiency based on previous research.

First, the editorials on Cold-Food Powder cited in the transmitted medical literature were arranged in chronological order as much as possible based on the bibliographic method. In addition, by comparing the prescription of Cold-Food Powder found in transmitted medical literature with various prescriptions found in the excavated literature, it was clarified that the template of Cold-Food Powder already existed from Western Han 西漢 to Eastern Han 東漢. Based on this, I analyzed the development of medical ideas regarding Cold-Food Powder.

For a while after the outbreak of Cold-Food Powder, as seen in the theory of Huangfu Mi 皇甫謐, Cao Xi 曹翕, and Kong Xun 孔恂, they tried to find how to deal with the medicinal properties and side effects of Cold-Food Powder based on empirical rules and traditional medical logic. And after reaching Dao hong 道洪, arrangements based on the theory of the new system and coping methods by the drug method were proposed. Following that, Ge Hong 葛洪, Chen Yanzhi 陳延之, and Hui Yi 慧義 evaluated the previous theories and tried to improve and create medicines. Later, Mr. Xiahou 夏侯氏, Xu Xiaochong 許孝崇, and Xue Yao 薛曜 had their own creations, but nothing exceeded the previous theory.